

## 論文の和文要旨

|      |                           |
|------|---------------------------|
| 論文題目 | 現代ドイツ語における接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合 |
| 氏名   | 佐藤宙洋                      |

本研究は、現代ドイツ語において接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合が数多く存在するのはなぜかという問題意識のもと、先行研究が両者の競合に指摘する規則的な内容的差異が実際にはどの程度認められるのかを、コーパスを用いた事例研究を通じて検討するものである。

接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合とは、例えば *erblühen* (=接頭辞動詞) と *aufblühen* (=不変化詞動詞) の間に成り立つような関係のことである。両語は、*er-* (=接頭辞) を持つが *auf-* (=不変化詞) を持つかという点では異なるものの、「咲き始める」という語義の点、あるいは前綴りの機能が開始相化であるという点では同じである。

現代ドイツ語には、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合が数多く見られる。接頭辞動詞間の競合や不変化詞動詞間の競合は「それほど頻繁でない」(Erben <sup>5</sup>2006: 85) ことに鑑みると、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合は、何か理由があって多く存在しているのではないかと予想される。

広い意味での先行研究には、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して特定の内容的差異が(ある程度)規則的に観察されると述べるものがある (Streitberg 1895; Dunger <sup>8</sup>1929; Erben <sup>11</sup>1972; Curme <sup>2</sup>1974; Weinrich 1993; Dewell 2011, 2015; Helbig/Buscha 2017; Duden <sup>3</sup>2018)。もし実際に両者の競合において特定の内容的差異が規則的に表れるのであれば、それを表すのが接頭辞動詞と不変化詞動詞という構造の違いとその対立の果たす機能であり当該競合の存在目的である、ということになるだろう。

しかし先行研究には、どのような内容的差異が当該競合のどの範囲で規則的に認められるのかに関して見解の相違がある。したがって本研究は、コーパスを用いた事例研究に取り組み、当該競合における両者の内容的差異の実態を考察したい。

本研究が事例として取り上げる競合は以下の9例である：

- (1) a. *durchbohren, durchbohren* 「～を穿つ」
- durchblättern, durchblättern* 「～を通覧する」
- übersiedeln, übersiedeln* 「移住する」
- überführen, überführen* 「～を移す」
- unterschieben, unterschieben* 「～に…を押し付ける」
- b. *erblühen, aufblühen* 「咲き始める」
- verblühen, abblühen* 「咲き終わる」
- erklingen, aufklingen* 「鳴り始める」
- belügen, anlügen* 「～に嘘をつく」

上記の事例は、先行研究の実態に合わせて、いわゆる分離・非分離の前綴り動詞における分離可能な場合 (=不変化詞動詞) と分離不可能な場合 (=接頭辞動詞) の競合と、分離・非分離の前綴り動詞以外の接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合から、それぞれの代表例として選定したものである。なお、本研究での呼び方だと (1a) は「タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合」例であり、(1b) は「タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合」例ということになる。

事例研究の結論として本研究は次の2つの仮説を提示する。

(2) タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に関する仮説：

前者の方が後者よりも比喩的・抽象的な傾向がある。

(3) durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合に関する仮説：

前者の方が後者よりも結果的である（＝後者の方が前者よりも過程的である）。

(2) の仮説は、Duden (<sup>3</sup>2018: 294) や Helbig/Buscha (2017: 202) が durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合について記述ないし指摘していたことを、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に敷衍したものと見なせる。

(3) の仮説は、Dunger (<sup>8</sup>1929: 81), Weinrich (1993: 1069), Duden (<sup>3</sup>2018: 294) の論述・記述と多かれ少なかれ同じ内容と言える。つまり、過程性（ないし結果性）に関する差異は、Curme (<sup>2</sup>1974: 328) や Erben (<sup>11</sup>1972: 71f.) が述べているようにタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合にある程度一般的に観察される、というわけではなく、むしろ durch- 接頭辞動詞と durch- 不変化動詞の競合に限って観察されるのではないか、という仮説である。

他方、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合には、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合とは異なり、何らかの規則的な差異ないし差異の傾向というのは見出し難い。なお、この結論は Erben (<sup>11</sup>1972: 73) から示唆される見解とも Dewell (2015) の見解とも異なるものである。

タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合においては、接頭辞動詞と不変化動詞という構造の違いが決定的というわけではないと考えられる。そうだとすれば、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合とタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合とでは、その存在理由も異なるものになる。後者に関しては (2) や (3) の仮説が答えになり得るが、前者の存在理由はある程度個別事例に即してしか語り得ないのではないだろうか。

以下各章の要約を述べる。なお、4 章と 5 章に関しては、過程性と抽象性・比喩性という観点だけを取り上げる。

1 章「はじめに」では、第 1 に本研究のテーマ、問題意識、課題について述べた。第 2 に動詞前綴りを 4 タイプに分けて先行研究における分類を整理すると共に、本研究では中立的な 4 分類（＝タイプ A 接頭辞動詞、タイプ B 接頭辞動詞、タイプ C1 不変化動詞、タイプ C2 不変化動詞）を用いる旨を述べ、それから接頭辞動詞と不変化動詞というカテゴリーを説明した。第 3 に競合という用語を定義した上で、先行研究における接頭辞動詞と不変化動詞の競合の言説を概観し、多くの文献で両者の競合が言及ないし考慮されていることを確認した。

2 章「先行研究の見解」では、1 章で概観したよりも踏み込んで、接頭辞動詞と不変化動詞の競合に関して先行研究がどのような内容的差異を認めてきたかを、第 1 にタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化動詞の競合に関する説、第 2 にタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合に関する説、第 3 に接頭辞動詞と不変化動詞の競合一般に関する説に分けて論じた。その結果、どのような内容的差異がどの範囲の競合で規則的に認められるのかに関する見解の相違が明らかになった。また、事例研究に際しては特に過程性と抽象性・比喩性に関わる差異に注目するのが妥当という見解を提示した。

3 章「事例研究に向けて」では、第 1 に durchbohren, durchblättern; übersiedeln, überführen; unterschieben; blühen 群, klingen 群, lügen 群を取り上げて実例の分析と考察を行なうことを述べた。第 2 に実例の収集には、コーパスとして Deutsches Referenzkorpus を、検索エンジンとし

て COSMAS II を利用する旨を述べた。また、検索から出力、有効データの収集とその分析を通じて語義抽出へと至る具体的な方法・手順を説明した。第3に実例の観察において過程性と比喩性・抽象性を判断する基準を論じた。まず過程性に関しては、複数の先行研究 (Rapp 1997; Nicolay 2007; Löbner<sup>2</sup>2015 など) に依拠する基準を用いながら文の時間的相的階層構造の基底、すなわち「事象性記述」 (de Swart 1998a, 2012, 2019) の指す状況タイプ (問題のあり方に対応して特にそれが Achievement 表現か Accomplishment 表現か) を解明し、そこから当該動詞の持続性を Smith (1997) のアプローチに依拠して明らかにした上で、競合する2つの動詞のどちらがより過程に注目する表現かを判断することを述べた。次に抽象性・比喩性に関しては、Skirl/Schwarz-Friesel (2007) と Löbner (2015) の論述に依拠して、選択制限の逸脱による動詞の意味推移の頻度に着目し、競合する2つの動詞のどちらがより抽象的・比喩的な表現か判断することを述べた。

4章「事例研究 I : タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合」では、第1に比喩性・抽象性について、一方で「～を穿つ」という語義における durchbohren と durchbohren の競合ならびに「～を移す」という語義における überführen と überführen の競合において、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも比喩的・抽象的であり、また「～に…を押し付ける」という語義における unterschieben と unterschieben の競合においても、同様の比喩性・抽象性の差が存在する可能性の高いことを明らかにした。しかし他方で「～を通覧する」という語義における durchblättern と durchblättern の競合ならびに「移住する」という語義における übersiedeln と übersiedeln の競合においては、比喩性・抽象性の差は (ほとんど) 関与的ではないことも明らかになったので、結論としては既に見た (2) の仮説を提示した。

第2に過程性の違いについて、一方で durchblättern と durchblättern の当該競合において、接頭辞動詞の方が不変化詞動詞よりも結果的であることを明らかにした。また durchbohren と durchbohren の当該競合においても、接頭辞動詞の方が [－持続的] であることから、過程性に関して同様の違いのある可能性は否定されなかった。しかし他方で unterschieben と unterschieben の当該競合においては、unterschieben が [－持続的] であり、不変化詞動詞の方が過程的である (= 接頭辞動詞の方が結果的である) という可能性が否定されることなどから、結論としては既に見た (3) の仮説を提示した。

5章「事例研究 II : タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合」では、第1に比喩性・抽象性について、一方で「咲き始める」という語義における erblühen と aufblühen の競合および可能性としては「鳴り始める」という語義における erklingen と aufklingen の競合において、不変化詞動詞の方がより比喩的・抽象的な表現であることを明らかにした。しかし他方で「咲き止む」という語義における verblühen と abblühen の競合においては逆に、接頭辞動詞の方がより比喩的・抽象的な表現であることが明らかになったので、規則的な差異ないし差異の傾向に関する仮説の形成には至らなかった。

第2に、今回扱ったタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合においては、過程性の違いは非関与的であることが明らかになった。具体的には、一方で erblühen と aufblühen の当該競合、verblühen と abblühen の当該競合、および belügen と anlügen の当該競合において、接頭辞動詞も不変化詞動詞も [+持続的] であり、かつどちらがより過程的とも言い難いことから、また他方で、erklingen と aufklingen の当該競合において両者とも [－持続的] であることから、過程性の違いは非関与的と言える。

第6章「おわりに」では、本研究の結論と課題 (および展望) について述べた。本研究の主な結論は既に述べた通りであるが、主な課題としては、仮説 (2) と (3) の検証が挙げられる。なお、(3) が正しい場合の理論的根拠の解明も課題として挙げられる。